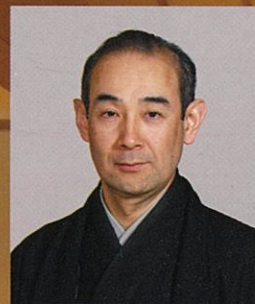


第22回

# 高崎演能の会

令和6年2月11日(日)  
午後1時30分開演(午後0時30分開場)  
高崎芸術劇場 スタジオシアター 能舞台



藤波 重彦



野村 萬齋



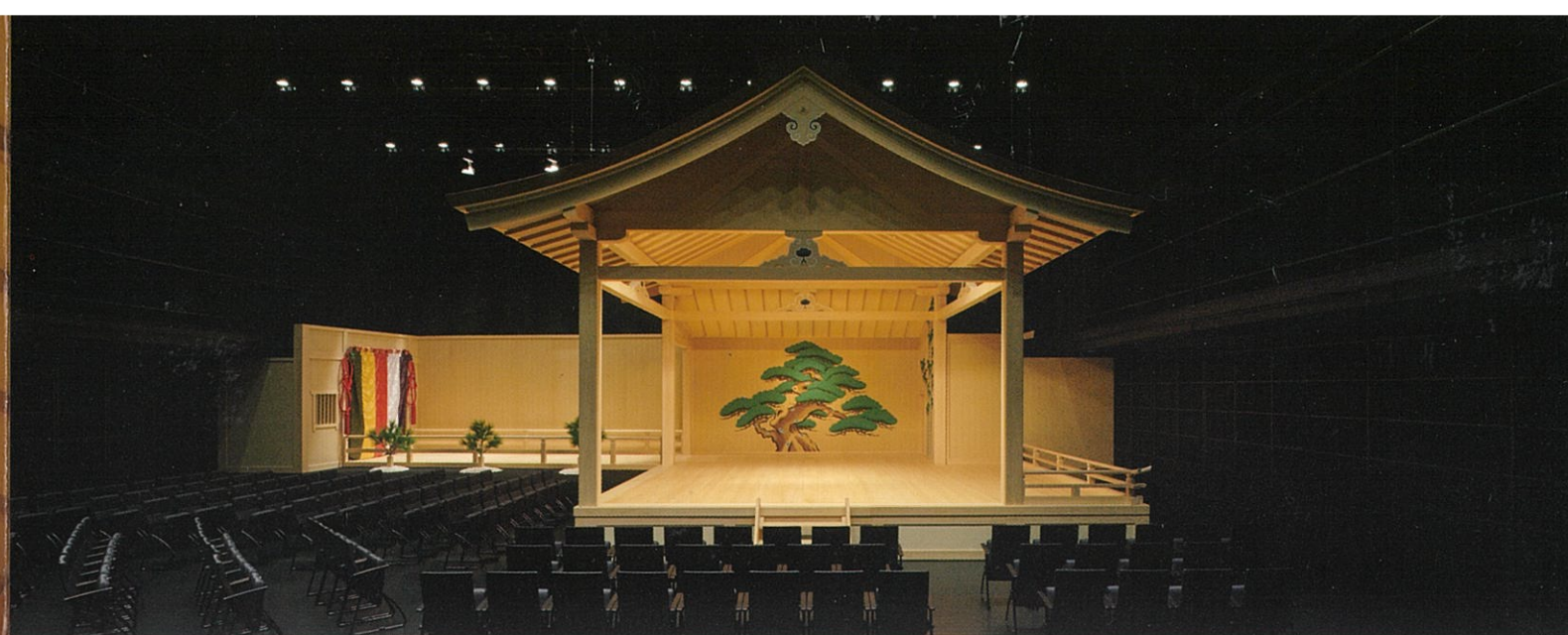
下平 克宏



仕舞 弱法師(観世流)  
狂言 佐渡狐(和泉流)  
能 山姥(観世流)

## 高崎芸術劇場

[写真]高崎芸術劇場 スタジオシアター 能舞台



## 令和6年2月11日(日)

午後1時30分開演(午後0時30分開場)

会場 高崎芸術劇場 1階 スタジオシアター 能舞台

入場料 全席指定(税込)  
S席:10,000円/A席:8,000円/B席:5,000円

チケット発売

Web 11/24(金)10:00~

●高崎芸術劇場メンバーズ限定(登録無料)

高崎芸術劇場



電話 11/28(火)10:00~

●高崎芸術劇場チケットセンター  
027-321-3900(10:00~18:00)

窓口 11/29(水)10:00~ ※電話発売で完売した場合は、  
窓口での販売はございません。

●高崎芸術劇場チケットカウンター  
●群馬音楽センター ●高崎市文化会館 ●高崎シティギャラリー  
ほか 高崎市施設プレイガイド

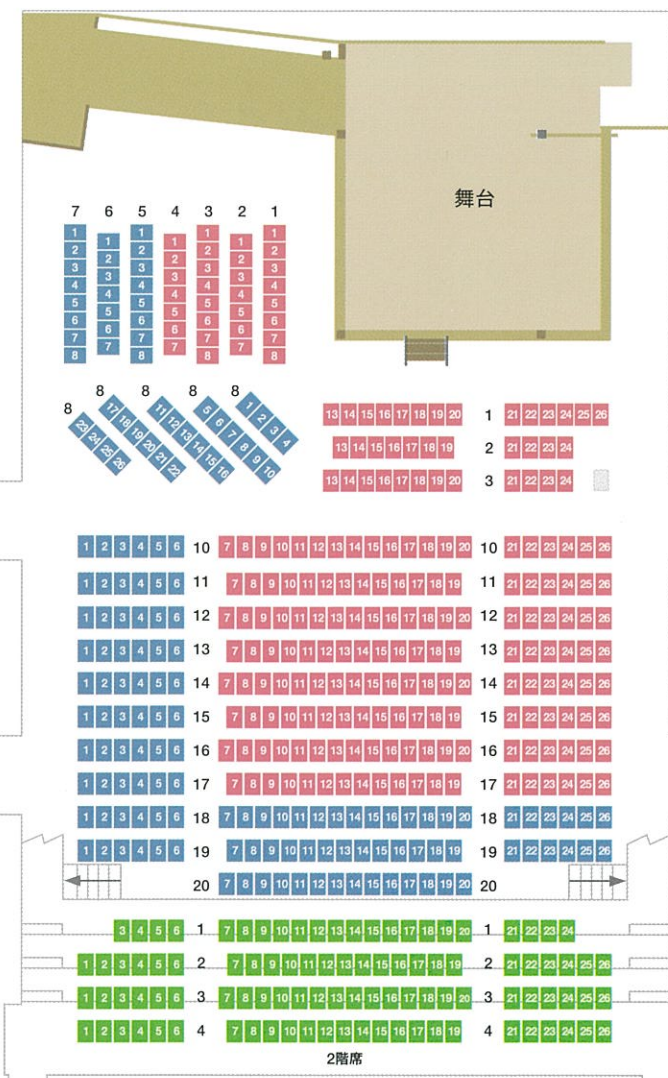
※未就学児の入場はご遠慮ください。  
※公演中止の場合を除き、一度購入されたチケットの払い戻し、交換はいたしかねますので  
ご了承ください。  
※車椅子席・介助席のご購入は、高崎芸術劇場チケットセンターまでお電話でお申し込み  
ください。

主催 高崎芸術劇場 一般社団法人  
(公益財団法人 高崎財団) 下平克宏演能の会

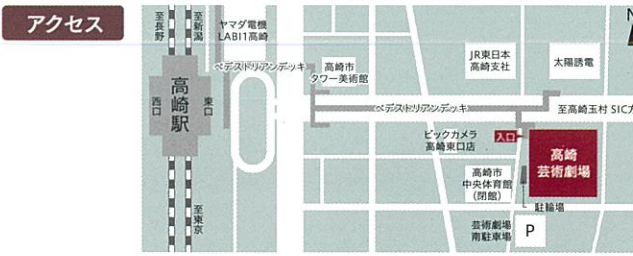
### 高崎演能の会 プレ講座

1/15(月)「山姥が山巡りするぞ、苦しさ」

13:30~15:30 高崎芸術劇場スタジオシアターにて  
事前にEメールまたは郵便はがきでの申込みが必要です。定員になり次第受付を終了いたします。  
【申込方法】代表の方の①郵便番号②住所③氏名(ふりがな)④電話番号⑤受講人数  
Eメール:concert@takasaki-foundation.or.jp(メール件名は「プレ講座」と入力してください)  
郵便:〒370-0841 高崎市栄町9-1 高崎芸術劇場「プレ講座」係へ



S席 10,000円 A席 8,000円 B席 5,000円



〒370-0841 群馬県高崎市栄町9-1 (JR高崎駅東口から徒歩5分)  
※専用駐車場はございません。

イヤホンガイドのご案内 能楽師によるライブ解説をワンコイン(500円)で! 当日会場にてイヤホンガイドの貸し出しを行います。※事前予約なし

# 第22回 高崎演能の会

令和6年2月11日(日)高崎芸術劇場 スタジオシアター 能舞台

午後一時三十分開演(午後0時三十分開場)

仕舞 弱法師

俊徳丸 藤波 重彦  
地謡 藤波 重孝

大松 洋一  
高梨 万里  
武田 崇史  
松木 崇俊

狂言 佐渡狐

佐渡のお百姓 野村 萬斎  
越後のお百姓 野村 太一郎  
奏者 高野 和憲

(休憩 十五分)

能 山姥

里女・山姥 下平 克宏  
百万山姥 大槻 崇充

従者 殿田 謙吉  
所の者 野村 裕基

笛 松田 弘之  
小鼓 大倉源次郎  
大鼓 亀井 広忠  
太鼓 小寺真佐人  
後見 武田 尚浩

地謡 大松 洋一  
藤波 重彦  
松木 千俊

イヤホンガイド

武田 崇史

終了予定 午後三時四十五分

## やまうば 山姥

山姥の曲舞を得意とした百万山姥という遊女が、善光寺詣りを思い立ち、都から越後・越中の国境の境川に着く。一行は、里人から勧められた上路を行く事となり、乗り物を捨て、徒歩で山道を行こうとする。すると、俄かに日が暮れ、一人の里女が現れる。女は宿を貸そうといい自分の庵に案内し、曲舞を所望する。女が山姥について詳しいのを不審に思い、従者が名を尋ねると、女は我こそは山姥であると明かす。そして曲舞を謡うなら、再び姿を現し歌に合わせて舞おうと言い捨て、消え失せる。

やがて夜も更け、遊女が笛を吹き待ち受けると、深山幽谷の気色の中に、山姥が奇怪な姿で現れる。山姥は遊女の謡に合わせて、自分の境涯や、四季折々に雪月花をたずねて山巡りするさまを舞ってみせ、やがて何処ともなく去ってゆく。山姥は恐ろしい鬼女というより、自然そのもののようであり、時に山人に寄り添う心優しい仙女です。その山巡りするさまは、苦行の連続する人間の姿ともいえましようか。終始鬼気に満ちた、迫りに満ちた作品です。



## さどぎつね 佐渡狐

年貢を納めに都へ上る途中で道連れになった、佐渡と越後のお百姓。佐渡に狐のいるいないを巡り賭けをすることになったが、実は佐渡には狐はおらず、狐を知らない佐渡のお百姓は、奏者(取次の役人)に賄賂を使い、味方についてもらう。しかし奏者の「佐渡に狐はいる」という判断に納得のいかない越後のお百姓に、狐の形恰好を問いただされ…。越後のお百姓の追及に必死で答える、佐渡のお百姓と奏者の連携プレーが見どころです。世相を風刺しつつ、中世の人々のたくましく生きる姿が笑いの中に描かれた狂言です。

